

紹介

浅見和彦・川村晃生著

『失われた日本の景観』

——「まほろばの国」の終焉』

本 田 逸 朗

日本の風土が年々その精彩を欠くようになって来ていると考えている人々は決して少なくあるまい。戦後、日本各地で国土の開発が行われてきた。それは確かに国民に目に見える利益を齎したが、それに反比例して精神的な豊かさとも言うべきものは貧しくなったのではなからうか。

その様な中、浅見和彦・川村晃生の両氏はこの惨状に警鐘を鳴らされて来た。本書は「高尾山の自然をまもる市民の会会報」に「まほろば」への旅」として連載された文章を中心として纏められたものである。お二方とも、自らの関心の向く所大きい場所を取り上げて、日本各地で美しい景観が破壊されている現状を危惧なされている。浅見和彦氏が序章「五重塔はなぜ美しいのか」及び、「高尾山」、「嵯峨野」、「巨椋池」、「平城京」、「新宿御苑」、「雀」、「ナラ枯れ」、「静かさと暗さ、そして貧しさ」、「地震と犯土」、そして書き下ろしの「神を畏れぬ人々」の項を執筆される。川村晃生氏は「はじめに」及び「親不知、子不知」、「九十九里浜」、「御宿海岸」、「原子力発電所」、「田子の浦」、「鬼沼山」、「伊豆半島」、「南アルプス」、「寒霞溪」、「琵琶湖岸」、「甲府駅前」、「慶應義塾」、描き下ろしで「景

観の力とは何か」を執筆され、また、「兩名での対談、「あとがき」を載せている。一つ一つの項目自体は決して長い物ではないが、当該の場所を描いた古典や近代の文学作品を多く引用され、現代の風景と対比される事から、かつて豊かだった自然が現在どれ程の痛手を蒙っているのかが読む者に強く迫って来る。

これらの場所ので起こっている事は、そのまま日本各地の多くの場所にはあつてはめる事が出来、また、将来的に当てはめられる可能性を逃れる事の出来る場所はあるまい。

その例として、まず「嵯峨野——照らし出された竹林」の項を取り上げてみよう。二〇一〇年の京都で、「京都 嵐山花灯路二〇一〇」という事が催された。その様子は一体どの様な有様であるか。少し本文を引用してみると左の如きである。

眼前の光景を見て、私は思わず驚きの声をあげてしまった。竹林の一面が竹の根元から高い葉先の先端まで残るところなく、強光線によって照らし出されているのである。

嵯峨野を代表する渡月橋もおそらくライトアップされているに違いないと予想しながら歩いて行くと、案の定、橋には色とりどりの明かりがともされ、時間を置いて赤、緑、黄……、と次々と色を変えていく。しかし、これで終っていなかった。川向こうの嵐山の山腹までが照明で照らし出されて、夜に不似合いな姿をさらしていた。ここまでやるか、というのが正直な思いであった。

この様な有様は竹林の玄妙さを損なうと嘆かれる。こうしたライトアップが行われるのは観光客を呼び込むためであろうが、それが却って竹林の、嵯峨野の地の真の魅力を損なわせる事に繋がるといふのは皮肉でしかあるまい。本文中には谷崎の「陰翳礼讃」を引いて、神戸須磨寺の電飾がうるさく、月見を取りやめた事を言っている。その他同時代の本を開いても思いがけずライトアップの記述に出くわす事もある。昔からライトアップという事は行われて来たらしい。

だが、日本の文化は明々とした派手さや豪華さと言った事を主軸にしては来なかった筈である。「静かさと暗さ、そして貧しさ——日本文化の基調」の項では、かつての日本人がどの様なところにその精神を置いてきたのかの説かれている。先人たちの紡いできた文化は失われていく一方なのだろうか。そうは思いたくないが、極めて直接的にこれらが破壊される例もまた見られるのだ。

「原子力発電所——破壊された祈りの場」の項を見ると、原子力発電所が海岸線の景観を破壊しているという視点からその問題が論じられている。若狭の地に作られた原発群は、古い伝説を伴った信仰の地を削り、押しつけて建てられているのである。一方で、一見クリーンに見える風力発電なども多くの問題を孕んでいる。それは「伊豆半島——知られざる巨大風車による受難」で詳しく述べられる。風力発電の為の風車は建設の為に木々を伐採し、山肌が切り開かれてしまう。そしてその完成した姿は山の中に歪な光景を齎し、人々に低周波に依る健康被害を与える。この項は「恐らく今後私た

ちが目指さねばならないのは、原発か自然エネルギーかという選択や転換の問題ではなく、思い切った低エネルギー社会の実現ではなろうか」と結論される。然りとすべきである。

様々な問題を抱えながら作り出された電気は、前述のライトアップの如きものにも使われている。この様に多くの問題はそれ単体で完結しているのではなく、根の所では絡まり合っているのだ。

繰り返しになるが本書で指摘されている問題は日本のどこも無関係ではありえない。今起こっている景観の破壊を食い止める為に、将来の景観の破壊を予防する為に、本書の発する警告は非常な有用性を持っている。読む人は是非、一文一文から多くの事を引き出し、自らの回りの景観がどうなっているかを眺め、考えて欲しいと思う。(平成二十七年一月三十日発行 二二二頁・二二〇〇円＋税 緑風出版)

(ほんだ・いつろう 大学院博士後期課程在学)